

## 海外林業研究会々員の広場

### プロジェクトが成功しないわけ (1) 伝統のゴミはどこに流れる

ちょっと衝撃的なタイトルをつけておきながら、こんな言い訳をするのは弱気だが、タイトルから早合点して、当事者として特定プロジェクトへの批判に構えたり、あるいは部外者としてそれを期待したりしないでいただきたい。「プロジェクトは成功しない」というのは、ゼノンのパラドクスのようなものである。したがって、「プロジェクトは成功しない」故に「プロジェクトは無駄である」という結論には至らないのでご安心下さい。

バリのマングローブ情報センタープロジェクトでエコツーリズム開発を行うこととなったが、深刻な問題に突き当たった。ゴミ、である。センターに流れ込んでいる川がある。上流はデンパサールだ。この川を伝って大量のゴミが流れてくる。センターのマングローブは一皮肉なことに一海洋を陸地からの汚染から守るという環境保全機能を十分に発揮し、その大量のゴミを堰き止めている。林縁で堰き止められなかったゴミも、林内に抱え込んで海に流さないようにしている。ビニール袋が呼吸根を覆い、枯死する *Sonneratia* も出ている。何にしる、エコツアーを行う場所としては視覚的にも嗅覚的にも美しくない。

ゴミ問題の解決は、当面解決すべき最重要課題として取り組んだ。直接的な水路の掃除はもちろん、物理的工作、ゴミ内容の調査、ゴミの出る構造の調査(住民の意識調査)、ワークショップを通じた啓発、関係機関との調整、ゴミ運搬カートの寄付まで、およそあらゆる対策を講じてきた。しかしその結果、ゴミ問題はいまだに解決していない。付け加えれば、川にコンクリートで蓋をしてしまう方法、ゴミの再利用を図る方法、ボランティアまたは集落対抗による清掃コンペティションなどもすでに検討した。

バリ人は、最近移住してきたジャワ人が川を汚しているという。昔は川はきれいだっただから、と。しかし、ゴミの内容物(ヒンドゥーの供物、ブタの屍骸など)を見ると、必ずしも移住ジャワ人のせいばかりとも思えない。むしろ、海を「悪いもの」がやってくる穢土と考えるバリの人たちにとって、海につながる川にゴミを捨てるのは伝統とさえ呼べる行為のように思われる。この、ゴミとか汚さに対する彼我の意識のずれが問題である。エコツーリズムを

やるからにはゴミ0%が国際標準だ、と(根拠なしに)訴えたところで、汚い川は病気の素、とかきれいな方が気持ちが良いでしょう、と言ったところで「それはそうだ」と首肯するものの、そのためにお金や労力を遣う気にはならない。何せ、伝統のようなものだから。このままでは観光客も来なくなって、観光業が廃れ、ひいては皆の生活も悪くなる、そういう説明は、理解はできるかも知れないが、納得できるだけの根拠がない。これだけの労力ないしお金をかけてこの川をきれいにすれば、これだけの観光客が増えて、これだけの収入の増加につながる、という説明を私はすることができない。

だからプロジェクトは成功しないのだ。

そう考えるのは早計である。意識の改革は教育によって行うことができる。教育のとっかかりにインセンティブが必要なことを理解すれば、そして教育の本当の成果が現れるのは二世代後のことだ、という気の長い思いを以ってすれば、そう悲観的になる必要はない。

本当の問題は実は別のところにある。先に「彼我の意識のずれ」と言ったが、ここで言う彼我は、必ずしもインドネシア人(もしくはバリ人)と日本人ということではないのだ。プロジェクトの実施者とそれを公的または私的に評価する者の間にも意識のずれがある。絶対的な基準がないのだから、実施者も評価者も勝手に意識するしかない。

客観的に評価できるように、プロジェクトでは目標を定める。たとえば、エコツアー客増加のために、これこれの期間にこれこれの投入を行って、水路のゴミの量を100%から10%に減らす、というように。プロジェクト終了時にゴミが10%になっていれば、それでプロジェクトの実施者は目標を達成したと言い、公的な評価者はそれを認める。しかし、ある意味で最も客観的な評価者である私的評価者はどうみるか。たとえゴミは減少しても客が増えなかったら。たとえ客が10%増加し、実質的な収入増があったとしても、どこかで企業がマングローブを埋め立てて作ったレジャーランドの収入がそれを上回ったら。逆にゴミは減らなかったが客が増えたら。プロジェクトが定めた目標以外のところで評価する基準は無数にあるのである。

結局のところ、プロジェクトがその目標を達成することは難しいことではない。しかし、客観的な評価によれば、プロジェクトは永遠に成功しない。

(羽鳥裕之)